

空



2006年

**SORA** 14号

晴夜 (14) | 2

柴田 佐知子

仕舞湯の手足を長く雛の夜

袖ひろげ闇の底なる捨雛

雛に結<sup>ゆ</sup>ひ男もひとり流しけり

桜鯛青玄海をはねて出し

あたたかや蹠てのひらふたつづつ

春霞山の水ごと鯉運び

菜の花にしづみて川の曲りけり

朴の木が鸞に仕上がる日永かな

金

魚

あさなが捷

囀れるまま一樹へとしづみゆく

牛の子の四角な顔に萌え始む

目も口も臙となりて地藏尊

菜の花に咽せて卒寿の母のこと

梅の下に現れさうな額女王

井戸端にれんげの束の残されし



病名を告げられ見入るスイトピー

雨の中どんたく隊の崩れざる

もはや目をあけぬ父なり山法師

悲しみの始まりの百合受胎告知

糸島平野をはねまはる鯉幟

田に水を張りて鰻絵の残る村

たいくつを知らず金魚の泳ぎをり

箒目に囲まれてをり楠青葉

大岩に飛び上がりたる土用波

浮草

小林朱夏

沈むを知らぬ浮草を突つきけり

上五島鯛ノ浦教会

浜木綿や被爆レンガをもつ教会

余所行きの月が昇りて梅雨明くる

用なきもの全て落として夏の蝶

夏霧や子牛の耳にせりの札

母と入る故郷の茅の輪小さかり



乳呑み児の汗を流して太りゆく

夕涼や短かく揃ふ夫の爪

体ごとぶつかつてゆく捕虫網

氷菓子肩の力を抜けと言ふ

溝凌へ仕上げの井水惜しみなく

消防士になるといふ子の水遊び

コンパスに少しの歪み日の盛り

昼寝の子西瓜の種を付けしまま

台風一過稜線未だ整はず

森に入る

里中章子

朝光のまだ冷えてをりクロツカス  
神妙に風に吹かれし針供養  
菂の臺寺領にありし小川かな  
朝寝して濡髪神社詣かな  
風の向き変りて澱む花吹雪  
啄木忌弱音吐かざる娘なり





猫の子は飲んで眠って鳴きにけり

水満たす檜の桶や鯉幟

菖蒲湯の胸はづかしき子なりけり

街の灯の間に沖の烏賊火かな

森に入る蝶はみどりに染まりけり

夕星や眠りのはやきしじみ蝶

切株に座す夏霧のつつむ山

お風呂屋の隣は床屋ソーダ水

踏んでゆく砂のさやぎや星祭

春  
の  
鳥

苑  
実耶

むづかしきことは忘れて金魚玉

湯殿より嬰の声する青葉の夜

もも色の紐で縛りし笹粽

掘ることの楽し筍山に入る

春風や絶えず動ける牛の口

些事の山笑ふほかなき金魚かな



欲ばりて春大根を両手にす

白壁を鉤手に曲る青葉かな

嫁ぎけりさくら菜の花諸葛菜

春まつり教へ子母になつてをり

鯉の池亀は遅れて鳴きにけり

祖母に文渡して嫁ぐ殻雨かな

黒ごまの跳ねる厨や春の鳥

嫁ぐ子のピアノ弾きをり春満月

春  
夕  
べ

高倉恵美子

麦畑の果てに大河のありにけり  
水温むクリークにある蜷の道  
いくつもの病を友と青き踏む  
作りすぎたる大根の花盛り  
てのひらの豆腐賽の日春夕べ  
忘るるは幸せなりと花種蒔く



恋猫の泥に汚れて戻りけり

ジーンズのはちきれさうな春休み

泣くことの少なくなりて桜咲く

男より女が強し花見酒

村中を廻る噂や山笑ふ

部活の子泊めてあふるる春障子

蛇穴を出てより行方不明なり

牡丹咲き花壇大きくなりけり

欲しきものなき齢なり春惜しむ